

それから約半年が経った。

ミュキが「ボクの手が届かないところ」に行ってから、もう実質1年以上が過ぎたことになる。

それまでは堅実に公務員試験でも受けて、市職員にでもなろうと考えていたのだが、今の僕は大きく考え方が変わったような気がする。

堅実な公務員になるのは、やめたのである。

それまでそれなりに色々こなして、結構気楽に、気ままにやっていたボクだったが、目標が出来たことで色々変わったらしい。

それは大手ファッション雑誌を出している出版社に就職すること。

ボクはミュキへの想いと、ミュキの見ていた世界、そして目指していた世界をただ見たくなっていた。

ただ現実的にファッションデザイナーになるのは困難だし、ボクにそんなセンスはない。

となると、それらを掲載する側にある出版社に就職するのが一番だと思ったからだ。

もちろんファッションの世界も知りたかったので、決意した半年前からあちこちのブティックや、デパート、アーケードなどを散策するようになった。

おかげで今となっては、下手なファッションマニア並の知識はあるという自負がある。

こうなると、自然にファッション自体に興味を持つようになり、それまではガサツで無個性な自身のファッションや、ヘアスタイルなどもこだわるようになり、ゼミでもあまり目立たなかったボクが、大学内でも一目置かれているのが自分でもわかるようになった。

ただし、そのファッション自体の意見は賛否両論のようである。

ま、所詮は自己満足な世界だから、いいんだけどね。

最近はお気に入りというか、好みのブティックが決まってきたため、基本的なルートが出来上がっていた。

というより、もう大学3年生も終盤を迎え、既にもう就職戦線は開かれていた。

そんなブラブラしている暇はない。

ボクももちろん、企業説明会や、就職活動が盛んになってきており、なかなか思ったように時間がコントロールできずにいた。

まだ救われていたのは、バイト先をK出版社になっていることであろうか？

このK出版社は、それこそ大手ファッション雑誌を手掛けている会社である。

ちなみにミュキが最後に当選した出版社ではない。

決して出版社の所為でミュキが「ボクの手が届かないところ」に行ったとは思っていないのであるが、無意識のうちに避けていた。

当初は短期アルバイトで、しかも仕事内容は雑用と言うこともあり、ジャンルなどお構い無しに、黙々と仕事をさせられていただけであった。

しかしチャンスが欲しい所為もあり、そのまま継続してアルバイトを続けたい旨を上司に話したところ、掛け合ってもらって継続してアルバイトさせてもらっている。

残念ながら、今の仕事内容ではファッション関係に絡むことが無いのではあるが、いつかはファッション関係の

取材や写真撮影だけでもいいから立ち会ってみたい。

とりあえずは就職活動、とりあえずはファッションの勉強、とりあえずは出版社の仕事を理解しよう。

ミュキのことを思うことで始めたことが、ボクを忙しくさせた。

そしていろいろと楽しみも増えたような気がして、とても充実感があった。

そういったことで少し心に余裕も出来てきた所為か、それとも自分の身なりを気にするようになったからか、2ヶ月前ぐらいからいつものコースでブティック廻りをしていると、なんだか決まった視線を感じるがあった。

ふと見ると、向かい側にあるブティックの女店員さんだった。

ボクを見ると、視線をそらしているのではあるのか、顔はちゃんと見たことはない。

でも、1度や2度ではない、その感じる視線を気になるようになっていた。

なので、お店に行って声を掛けてみようかとも思ったが、まず女性服専門のブティックに入って行って、店員にいきなり声をかけるという行為自体がどう考えてみてもおかしいし、その前にミュキのことがまだ頭の中から離れていないボクにとって、その行為を自粛させるのには充分であった。

4月を向かえ、就職活動を本格的にはじめたつもりであった。

その為ブラブラする時間が無く、ブティック巡りを自粛したため、例のブティックの前を通ることがなくなってしまった。

その就職活動だが、実際本格的に始めてみると、これがまた面倒くさい。

ボクの目標は出版社への就職。

なかなか希望の業種が少ないというのと、現在バイトしている会社を基準に見てしまうため、企業説明会でも最初はやる気を出して聞いていたことが、中身を知っているだけに本気で説明している部分が見当たらず、途方にくれることも多かった。

目標を持って就職活動するのはいいが、いいところが見当たらないと現実に幻滅してしまっているという現状。

まだ4月だが、もう就職活動にうんざりしてきていた。

もう大学に行くのは週に2日ぐらいなのだが、そのうんざり感を消し去りに大学を訪れることも増えてきていた。

今日もそのうんざり感を消し去りに、とりあえず大学にある学食へと向かった。

なぜか学食へ行けば、ボクと同じようにうんざりしているのではあるのか、同じゼミのクラスメイトが必ず数人はいるのである。

「お、カスガ！調子はどうだい？」

ボクに声をかけてきたのは、大学の中で一番仲がいいトシだ。

トシはなかなかカッコイイ男で、いつも女の子と一緒にいることが多い。

しかし彼女は今のところいないそうだ。

なんでもトラウマで、女の子のことを信用できないのだとか。

その割には、女性経験が多く、コンパの出場回数はかなり多い。

彼女を作らないこと自体が、ボクにはもったいないなと思う。

ボクの場合は、彼女がいた事自体奇跡に近かったのだ。

特に彼女といた時間が幸せに感じていたボクにとっては。

「おう、トシい…もう面倒くさくてさ…就職やめようかって思っちゃうよ。」

「おまえはまだいいよ。バイト先でなんとかなるかもしれないからさ。」

「でもまだ雑用だけだからさ、その線は薄いんじゃないかなあ…」

「俺なんかバイト先がマックだからね、まず就職なんてありえないね。」

その前に、トシはバイトすらいつも続かない。

飽きっぽい所為もあるが、女性関係が原因でクビになったこともあるらしい。

が、これは本人の弁であり、この辺は信用できない。

「そうそう…カスガ、今度合コンあるんだけど行く？」

「え、合コン？」

めずらしい…トシがボクを合コンに誘うなんて。

ボクはこれまでに、ほとんど合コンは断ってきていたので、去年ぐらいから誘われてなかったのだ。

「今度の相手、きっとカスガには興味あるかなって思ってさ。」

「どこの女の子？」

「T服飾専門学校～」

なるほど…それはちょっと興味あるかも。

この専門学校は、古くからあるファッションデザイナー育成の専門学校で、中には大手ブランドに就職した人も  
いるらしい。

「…なるほどね！ちょっと興味あるかも。」

「頭数で誘っているわけじゃないからな、ちゃんと参加してくれないと困るぞ。」

これまた…めずらしい…引き立て役ということではないということ、他の人間が忙しいのであろう。

「わかったよ。ちゃんと日取りだけ決めといてくれよな。」

「OK！わかったよ。また連絡するからさ。」

と言い残し、さっさとトシは引き上げていった。

合コンか…何年ぶりだろう。

服飾専門学校の女の子か…ファッションもそうだけど、情報も得られるかな？

ミュキと同じような志を持った子もいるのかな？

なんだか楽しみになってきた。

…ミュキはこんなボクのこと、どう思っているのかな？

ミュキの両親は、ミュキが「僕の手が届かないところ」に行ってから間もなく海外へ旅立っているため、ホントに  
消息不明である。

ボクが聞いた話によると、ミュキのお父さんが研究していることで、イギリスまで夫婦揃って向かったということらしい。

ちなみにミュキのお父さんの職業は大学教授であり、医学関係の博士号と取ろうと毎日研究しているらしい。  
もしかしてミュキにも関連するとかとも思ったが、かなり前から決まっていた話らしく、どの道ミュキがいたとしても、  
そのまま夫婦で海外に出るといったことだった。

合コンか…もしかしてミュキそっくりな人いたりして。  
でもなんとなく、そうではないが予感みたいなものを感じていた。  
なんとなく、なんとなく…だけど楽しみになっていた。

翌日にトシからメールが来た。  
「今週の土曜日の午後7時に、ショッピングモールの入り口に集合だす。気合入れとけ！」  
だって。  
って、それだけかい！  
相手は？  
スケジュールは？  
ホントに…トシはいつもこうだから…  
今週の土曜日と…って、ええっ！  
なんとこの日は、初めて取材に付き合う日。  
これまでは社内での雑用しかやらせてもらえなかったのだが、やっと取材に同行できる日だったのだ。  
これは困った…。  
とりあえず断るのもなんなので、時間をずらすことが出来ないかをトシに返信してみた。  
「遅れてでもいいから来い！1次会では終わらない！」  
だって。  
そりゃ終わらないだろうけどさ…後から行くとその場の盛り上がりについていけないんだよ…。  
もう合コン行くのやめようかな？  
ということで、断りのメールをトシに返信してみた。  
「お前が来ないと話にならないから、それは無理。」  
だって。  
トホホ…一度OKを出していた以上、非常に断りにくい…  
でも今回の件は、ボクにこだわっているような気がする。  
なにかを企んでいるに違いない。  
…いや、気のせいだな。  
でもここは何も聞かずに、「当日は遅れていく」ということだけトシに返信した。

どうどう合コン当日となった。  
というより、取材の立会いができる日を迎えた。  
これはチャンス！  
うまく行けば、このままこの出版社へ就職できるかも知れない。  
というのは、ちょっと考えすぎか？  
でもここでいいところを見せないと…初めての取材の手伝いだ。  
ここは気を引き締めていこう。

まずは出社、編集長のところへ今日のスケジュールの確認、今日同行させて頂く斉藤さんへの挨拶、そして早速目的地へ向かって出発。

取材は時間が大切だ。

何事も段取りよく、スピーディに、ビジネスライクに…。

その取材先へ向かう車内で、初めて今日の取材相手のことを聞いた。

ボクはちょっとびっくりした。

なんと今日の取材相手は、ファッション関係もいいところなのだ。

しかも、ミュキのように作品投稿で入賞した人を取材するらしい。

ボクにとっては、すごく偶然に感じた。

ちょっとの緊張と、かなりの期待を胸に、車は目的地へと向かっていった。

車はとある喫茶店の駐車場で停車した。

喫茶店で取材なのだ。

ここで、午後3時に取材相手と待ち合わせ、会食しながらの取材だ。

ボクの今日の仕事は、その取材の手伝い。

ボイスレコーダーでの録音と、デジカメによる写真撮影が主な仕事となるそう。

なんだか自分もジャーナリストしているような気分だ。

というより、今日の仕事はジャーナリストの仕事といって差し支えないだろう。

今の時刻は2時45分ぐらい。

入店して、斉藤さんと中で待つこととなった。

デジカメOK、ボイスレコーダーOK、あと一応メモ帳もと…。

ボクは相手がどんな人なのか聞いてないので、斉藤さんに聞いてみることにした。

「今回の人は、どんな感じの人なんですか？学生ですか？」

「今はフリーターみたいだよ。なんでも小学生の頃からいろいろと縫製はやってみたい。今回の作品はなかなか物だったんだよ。」

と、数枚の写真をボクに見せてくれた。

…！

めっちゃめっちゃかわいい女の子なんですけど…！

「女の子を見るんじゃないぞお？」

ボクのその様子を見てか、斉藤さんは僕に言った。

ニヤツとして。

「な、何を言ってるんですか！？ふ、服ですよ、服！？」

ホントホント、ボクがそちらに興味を持つわけ無いじゃないか…

と、そんなことを答えつつ、まだある写真を見てみた。

数々の作品の写真がそこにはあった。

ホントにとっても興味がそそられる作品ばかりだ。

個人的にすごく好みのデザインが多く、いろいろ聞いてみたい気がしてきた。

うんうん…？…

…このジャケットはどこかで見たことあるような？

よくよく見ると、このモデルの女の子もどこかで見たことあるような…

…思い出せない…

しかし、ホントに興味がそそられる服ばかりだ。

斬新とは言えないまでも、コンベンショナルなデザインの中に新しさを感じさせるセンスというのか、そういうものが伝わってくる作品が多い。

ホント、今日の仕事は大変ありがたい。

編集長に感謝感謝である。

「…はじめまして…。」

ふと、若い女性の声が出た。

どうやら、今回の取材相手が来たらしい。

早速ボイスレコーダーのスイッチをONにし、取材に備えた。

そしてその女性の声が出たほうを見てみた。

…！

ミュキ！？

いや、そんなはずはない…でも、本当にそっくりだ…。

私は目を点にして彼女を見ていた。

が、彼女も私のことを見て、なにか反応したようだった。

「あ。」

斉藤さんは、そんなボク達のことを見てこう言った。

「あ、二人とも知り合い？」

ボクはその一言で正常な意識を取り戻した。

そして改めて彼女を見た。

…確かにミュキに似ているが、ちょっと目元が違うか？

あと、ミュキよりも細い。

そして、ミュキよりも全然スタイルがいいのが、その服装のラインを見ても良くわかる。

それほど薄着ではないのであるが、でも要所要所に露出部分が見え、そのスタイルのいいボディラインの片鱗が見える。

そして極めつけが、すべての化粧がバッチリ決まっていて、しかもそれが自然な感じで、思わず見とれてしまいそうだ。

鼻もミュキよりも若干すっきりした感じに見える。

とても良く似ているが、やはりミュキではないようだ。

そして女性はボクに向かってこう言った。

「いつも私が働いているブティックの周りをよく歩いている人ですね？」

…！

ボクはそこで彼女が何者かがわかった。

ボクがブティック巡りをしているときに、視線をボクに向けていた彼女だ！

いや、ボクは遠めでしか見てないし、彼女の顔ははっきり見たわけではないのだが、でもなんとなく雰囲気ですわかってしまった。

「あのブティックの店員さん！？」

「そうです！いつも見かける方だったので、私もびっくりしました！」

なぜかわからないが、彼女はうれしそうにそう言った。

「吉村美優(みゆ)っていいです。よろしくお願ひします！」

…名前も微妙に似ている…苗字は違うけど。

ちなみにミュキの苗字は吉野。

やっぱり別人だよね…。

微妙に名前は似ているけど、別人であることには違いない。

斉藤さんはボク達の紹介を始めた。

「はじめまして、K出版の斉藤と、助手の中野くんです。よろしくお願ひいたします。」

斉藤さんは場を自然にとりなすように、静かに自己紹介してくれた。

「中野カスガです。改めてよろしくおねがひします。」

ボクもなぜか熱くなってしまった…反省…

落ちついてボイスレコーダーのスイッチをオンにした。

そこからは斉藤さんから吉村さんへ、いろいろと聞き取りに入った。

服のデザインを始めたきっかけや、今回の受賞した作品のコンセプトなど…

ボクもボイスレコーダーを片手に、取材を聞いていた。

…はずだった。

実際のところ、ボクは彼女のことはばかり見ていた。

確かにかなりミュキに似ている部分があることは否めない。

顔とか、あと声も似ているかもしれない。

またその事とは別にしても、女性としてスタイルもいいし、今着ている服装も似合ってる。

しかし生き生きと話すその姿は、本当にいい笑顔だった。

…かわいい…

正直その一言だった。

ボクは一目惚れしてしまったのであろうか？

いや、一目惚れとは違うな…

なんだろう…妙に好感が持てるのだ。

見ているだけで。

ふと、斉藤さんの携帯が鳴った。

「あ、すみません、少し席を外します。失礼します。」

斉藤さんは携帯を片手に外へと向かった。

彼女と二人きりになってしまった。

彼女を見てみると、結構リラックスしているように見える。

結構取材とか受けたことあるのかな？

…なにか彼女に聞いてみようかな？

今のうちに…。

「あ、あの…」

ボクは思い切って話しかけてみた。

「え、あ、ハイ！？」

ボクがいきなり話しかけたのでびっくりしたのか、少し声が裏返っていた。

「あそこのブティックで働いてるんですか？」

「あ、ハイ。まだ2ヶ月ぐらいなんです。あそこのブティックは。それまでは専門学校に通ってたんですよ。」

「服飾関係の？」

「ハイ。T服飾専門学校に通ってたんですが、いろいろあって学校辞めちゃったんです。今は独学でこうやっていろいろデザインしたり、服を作ってみたりしてるんです。」

う〜ん、偶然が重なるといふか…。

視線を感じ出したその頃に、彼女はあそこに勤め始めたというわけか…。

「美優さんのその服のデザインとか…ボク個人的に大好きですよ。」

「あ、ありがとうございます！デザイン自体は学校行く前からずっとやりました！」

彼女はすごくうれしそうだ。

その笑顔がなんともミユキにすごく似ているような気がする。

世界に3人は似ている人がいるというのは聞くけど、その一人が彼女なのかもしれない。

なんとなく喋り方も似ているように感じてきた。

「あ〜すみませんでしたね！取材の続きのほういいですか？」

斉藤さんが戻ってきた。

それからはまた斉藤さんがいろいろと取材。

それから10分ぐらい後だろうか、取材は無事終わった。

彼女はニコニコしている。

「またデザインがんばってくださいね！今回の記事は、来月号に載る予定ですので、出来次第そちらに発送しますから楽しみにしてください。」

斉藤さんが取材の締めを行った。

「ハイ！今日はありがとうございました！」

お互いに挨拶をし、彼女は席を外した。

その際に、気のせいだろうか？

彼女はボクにウインクをしたような？

目にゴミでも入ったのかな？

ボクはキョトンとしているうちに、彼女は店を出ていた。

「カスガく〜ん。彼女に何を聞いてたんだい？」

いきなり斉藤さんが悪戯っぽくボクに聞いてきた。

「え、いや、なんでもないですよ。ファッションのことにですよ！ファッション！」

「またまた〜、口説いてたんじゃないの？可愛い子だったし。」

ホント、意地悪な斉藤さんだ…。

でもホントに可愛い子だったな。

あのブティックに行けばいつでも逢えるかな？

なんだか微妙だったけど、初取材ということもあり、仕事とはいえ楽しい時間が過ごせた。

それからは会社に戻り、いろいろと書類のまとめや、先ほど収録したボイスレコーダーの内容をパソコンに整理したりと、いつも以上の数々の雑用をこなしていった。

そうしているうちに、時刻は午後6時を廻っていた。

確か合コンの待ち合わせは午後7時。

このままでは自宅に帰れない。

そう思って、それなりの服装をして、車で職場に来たのは正解だったかもしれない。

今日の合コン相手は、T服飾専門学校の女の子達。

色々ネタを仕入れなければ。

そういえば、今日の取材の彼女も元々はT服飾専門学校に通ってたって言ってたっけ？

なんだかホントに偶然が重なるなあ。

色々考えながら仕事をしていたら、あっという間に30分ほど経ってしまった。

マズイ、遅れるとっておいたものの、これ以上は遅れすぎる。

車で来たとはいえ、駐車場を探して、そこから歩いて現地まで行くことを考えるとそれなりのマージンをとっていかなければ、かなり遅れてしまう。

もう少しで終わる…もう少しで終わる…

…やっと終わった。

時刻は7時。

マズイ！

ボクは猛ダッシュで支度を整えて、斉藤さんに挨拶をしてから職場を離れた。

トシはうるさいからな…遅れるといっても。

ボクは車の置いてある駐車場に急いだ。

そそくさと車に乗り、助手席においてあるジャケットを身に付け、エンジンに火を入れた。

そして颯爽と目的地へと向かった。

なんとかいい駐車場も見つかり、車を預けて合コン会場へと早足で向かった。

時刻は7時35分。

目の前に目的地のビルを発見。

エレベータに乗り、コンパ会場があるBARへと向かった。

「いらっしゃいませ。何名様でしょうか？」

「あ、予約で入ってると思うのですが…」

ボクが店員に聞いているところ、先に来ているトシがボクに気づいた様だった。

「お〜い！こっちだ、こっちい！」

既に酔っ払っているな…ありゃ…。

ボクはしぶしぶトシのいる方へと向かった。

やはり後から合コンに参加するのは厳しい。

テンションが違うのである。

なんとかこのテンションに合わせてなければ…

「そういえば、まだもう一人女の子来てないんだよ〜」

…男は3人いるのに、女は2人だけだ。

その中の女の子の一人は、なんとミユキの親友であるアイちゃんだ。

久しぶりだな…

トシとアイちゃんに接点は無いはずだから、きっともう一人の女の子と知り合いなのかな？

それともこの場にはいないもう一人？

でも今日はT服飾専門学校の人だけかと思ったけど…その辺はどうもアバウトらしい。

アイちゃんは短大生だから、他の二人の女の子が学生なんだろう。

そうそう、あと女の子が一人がいらない。

てっきり一人はトイレにでも行っているのかと思ったが、まだ来ていないということだったか…。

と、そうだった。

今回の合コン参加の目的は、もちろん気分転換もあったが、情報収集も今回の目的だった。

が、少々…どころか、ボクは大分出遅れたらしい。

…というより、もう合コンが始まってから1時間近くは経っている。

案の定、当然のように、先発者全員出来上がっているのだ。

酔っ払ってなければ、この二人の女の子も、おしゃれで美人に見えるのであろうが、すでに二人とも眉毛が消えかかってきている。

しかも化粧が落ちてきていることに気づいてないということは、もう出来上がっている証拠だ。

まだトイレには行ってないのであろうか…。

少なくともトイレに行けば気づくだろう。

あ、眉毛無い…って。

やっぱりこのテンションについていくのは厳しい。

どうしようかと考えていたところ、

「あ〜っ！遅い〜！」

と、アイちゃんじゃないほうの女の子の声でした。

「ごめ〜ん！こんばんは〜！」

思わずその声を聴いて、ふと見上げると、なんと今日の午後取材した彼女ではないか！

そう、吉村美優ちゃん。

昼間とは違う服装で着ていた。

昼間のときは、結構カジュアルな感じだったのであるが、今は結構フォーマルな、コンサバティブな服装で、すごく大人っぽく見える。

そしてお互い目が合ってしまった。

「あ！」

二人とも声をダブらせた。

「なんだ〜？カスガあ、彼女知ってるのかあ〜？」

すっかり酔っ払っているトシが聞いてきた。

「え、あ、うん、ちょっと…」

トシがニヤッとした。

「おまえも隅に置けないなあ〜。こんな娘がおまえにいるなら、今日は誘わなかったぜえ〜」

ハァ…すごいテンションだ。

とてもついていけないぞ、今日は。

ふと美優ちゃんを見ると、困ったように立ちすくんでいた。

恐らくボクと同じように感じたのであろう。

テンション違いすぎるって。

そこでボクは一声掛けた。

「ボクもさっき来たところなんです。ここ空けますんで座ってください。」

「あ、すみません…」

このちょっとしたやり取りだけでも、トシから執拗な突込みが入る。

「お〜ラブラブですな〜。ね〜？」

みんな揃って「ね〜？」

「あのなあ〜…」

ボクはそれ以上にも言う気がなくなっていた。

ふと美優ちゃんを見ると、なぜか笑っている。

「すごいテンションですね〜！付いていけないかも！？」

彼女は笑いながらそう言った。

…かわいい！

この笑顔、すごく可愛い！

そして今晚の服装も似合っているし、とてもカッコイイ！

「ボクも付いていけそうに無いですよ。ということで一緒になにか飲みませんか？」

なんとなく意気投合した気がしたので、そんなことも言ってみた。

「そうですね！ 飲みましょっか！？」

既に1度会っているからだろうか、なんとなく親近感を感じていた。

すごくいい雰囲気を持つ彼女…どんどん引き込まれていきそうだ。

しかも偶然が偶然を呼んでいるのか、なんとなく運命的なものも感じていた。

勝手に盛り上がっているトシ連中を放っておいて、ボクと美優ちゃんは、今日のこと、たわいの無い話などをしながら、のんびりお酒を飲んでいた。

そして話していくたびに、そして美優ちゃんを見続けていて、とてもココロが暖かくなるような気がした。

これはお酒のせい？ それとも恋心？

なんだか分からないうちに、1次会が終わる時間になったようだ。

それぞれ1次会の集金も済ませて、店の入り口のところでプチ会議。

みんな酔っ払っていても、この辺はしっかりしているのがすごい。

「次カラオケ～。みんな行くよね！？」

トシのいかにも酔っ払った大きな声が、ビルの中を駆け巡った。

ボクも美優ちゃんもそこまでは酔っ払ってはいない。

なにせ来てからほんの30分ぐらいで、しかもマイペースに呑んでいたため、非常に良い感じのほろ酔い状態ではないのだ。

そしてそのほろ酔い状態も、他4名の様子をみると、明らかにこちらの方が冷静さを保っているのが分かる。

でも2次会はどうしようかな…美優ちゃんはどうするかな？

「私、今日は1次会で…」

美優ちゃんは2次会に行かないようだ。

ボクはすかさず、

「ボクも今日はこの辺で…」

あ、しまった…

「ヒュ～ヒュ～、ラブラブなお二人さんは別行動ってことですかい！？」

…そう来ると思った。

タイミングが悪かったな…思わず美優ちゃんの発言に反応してしまった。

「はいはい、そうです、そうです。これからデートで～すよ～。」

ボクはもう半分ヤケになって、そう言ってみた。

「わかったよ～。もうお二人はお好きになさってくださいまし～。じゃ行こうぜ～」

！？

トシはあっさりと、他の3人を引き連れて、さっさと手を振りながら行ってしまった。

ボクはその光景を見て、啞然としてしまった。

「ね、これから散歩しない？」

その唾然としてマヌケ面なボクに、美優ちゃんが話しかけてきたものだから、

「え！…う、うん。」

ビックリして、そのまま返事をしてしまった。

「デートするんでしょ？デート！」

ボクはドキッとした。

一瞬ミュキに見えた美優ちゃんを、目をこすりながら見直して、先を歩いていってしまった美優ちゃんを追いかけた。

なんでミュキに見えたんだろう？

確かに美優ちゃんは結構ミュキに似ているところがあるけど、スタイルは美優ちゃんの方が全然抜群だし、ミュキよりも美人だ。

しかもミュキは今日のような化粧や、服装をしなかったもので、そのように見えることはないはずだけど…

ボクが未練を持ちすぎているのか？

ミュキが「ボクの手が届かないところ」に行って既に1年以上は経っているし、もうこだわらないほうがいいのか？

…

なんだか短時間で色々考えてしまった。

その様子が顔に出ていたのであろう、美優ちゃんが心配そうに聞いてきた。

「なにかあったの？もしかしてカラオケ行きたかった？」

ボクはあわてて、

「違う違う！ちょっと考え事しててさ。ゴメンね、心配かけて。」

美優ちゃんはまだ心配しているようだ。

その後少しだけ無言の時があった。

…まだ逢ったばかりだけど、美優ちゃんには話そうかな…ミュキのこと。

「ねえ、公園寄ってもいい？」

「うん、いいよ。酔い覚ましにお散歩したかったし。」

…美優ちゃんもなにか考えていたのであろうか？

この話し掛けたタイミングが、お互いにとってちょうど良かったような感覚を憶えた。

と、勝手にボクが思っているだけなのだが…

でも今の美優ちゃんは、少し微笑んでいるように見えた。

そして目の前はすでに「鴨の池公園」の入り口だった。

「鴨の池公園」はS市の中心にありながら非常に大きく、緑が多く、そして大きな池があり、昼間であればレンタルボートでボートに乗ることもできる。

またレンタル自転車もあり、軽いレクリエーションぐらいなら出来てしまう。

キャンプや火気の取り扱いが出来ないが、花見の時期には宴会が繰り広げられる、S市のセントラルパーク的な公園だ。

散歩しながらの話にはもってこいの場所でもある。

ホント、今日はタイミングというか、偶然っていうのが多すぎるような気がする。

少しほろ酔いのボクは、話そうとする内容のどこからどこまでを話そうか考えていた。

「いい星空～」

美優ちゃんが空を見て言った。

ホントにきれいな夜空だ。

都会中でもこんなに星がきれいに見える。

普段はそんなこと微塵も感じないのに…。

これもボクが酔っ払っているせいだろうか？

おかしい…今晚はすべてがきれいに見えるような気がする。

どうしてだろう？

美優ちゃんのせい？それともどこかでミュキを感じるから？

…ミュキを感じる？

なんでそう思ったんだろう…。

直感！？

ありえない！？

「ねえ？カスガくんは就職決まったの？」

その美優ちゃんの突拍子も無い質問を投げかけられたのがきっかけで、ボクの中で何かがふっとんだ。

「美優ちゃん、ボクと付き合って！」

！

ボクは何を言ってるんだ！

おかしい！

ホント、ボクおかしいです！

美優ちゃんは凄くビックリした顔をしている。

当然だ。

今日逢ったばかりの相手に、いきなり「付き合って」である。

困惑しないほうがおかしい。

「ね、ねえ、少し落ち着こうよ。ね？」

美優ちゃんになだめられてしまった。

ボクはハッとして、

「ゴメン、なんでだろう…なんだか思わずそう言っちゃったんだ。ゴメンね…今のは忘れて！」

美優ちゃんは近くにあるベンチにボクを座らせ、美優ちゃん自身も隣に座った。

美優ちゃんがボクの手を握りながら。

…少しずつ落ち着いてきたような気がする。

美優ちゃん、ずっとボクの手を握ったままだ。

暖かい…柔らかい…落ち着く…

なんで…どうしてだろう…やっぱりミュキに似ているところがあるからだろうか？

ボクは美優ちゃんの顔を恐る恐る見てみた。

…

美優ちゃんは黙ってボクの様子を見ているようだ。

…

そして美優ちゃんは口を開いた。

「ワタシね、実は合コンって今日初めてて、今日来たのも人数合わせみたいな感じだったの。」

ボクは黙って聞いていた。

「ホントは別な子だったんだけど、その子がどうしても行けないからってワタシに代わりに行ってきてって。カスガくんもその場にいたからわかると思うけど、今日取材だったでしょ？そしてはじめての合コン…今日って言う日がワタシにとってすごい緊張だったの。そしたら取材でさっきまで会ってたカスガ君がいて…なんだかホッとしたの。なぜだか分からないけど…ワタシもカスガくんにごうして直接逢ったのが2回目だからとかじゃなくて…なんていうんだろぅ…」

…美優ちゃんもボクと同じようなことを考えていたのか？

ボクはなんとなく、

「身近に感じた？」

「そ、そう！なんだか身近に感じたの！」

やっぱり同じだ…同じ風に考えていた。

なんという偶然なのだろう。

偶然が度々重なり、そしてまたこの偶然…

とても運命を感じずにはいられなかった。

ボクは改まってこう言った。

「美優ちゃん、ボクと付き合ってください。友達からでもいいです。ホントに今日逢ったばかりだけど、ホントにボクの中だけだけど、偶然というか、運命的に感じて…だからお願いします。ボクと付き合ってください。」

恋愛に関してだけで言えば、ココまで気持ちが高鳴って、ここまでしっかりと行動したことがあったであろうか？

ホントに今までは無かった。

前の彼女のときは勢いで告白だったし、ミユキのときはボクから告白したわけじゃないし…。

ボクは美優ちゃんの顔を見つめながら、美優ちゃんの返答を待った。

美優ちゃんはまた少しピクッリしたようだったが、少し間をおいてから、

「うん。」

微笑んでそう言った。

ボクの目から、自然に涙が流れた。

美優ちゃんも涙を流している。

ここまでお互いの意思が重なり合うことがあるのだろうか…

二人は立ち上がり、抱きしめあった。

そして唇を重ねた。

翌朝、ボクは彼女のベッドで目を覚ました。

あの後、彼女が一人暮らしをしている部屋で一夜を過ごしたのだ。

横には既に彼女の姿はない。

既に彼女は起きていたようだ。

今何時だろう？

…午前10時30分。

向こうのほうで何かカチャカチャと物音がする。

そしていい匂いも。

ボクは様子を見に行きたかったが、少し不安も覚えていた。

さすがに昨日あったばかりの女の子に、ほとんど勢いでなかっただろうか？

いきなり告白してしまい、そしてこんなことになってしまったこと。

ボクは嫌悪感を憶えていた。

よかったのか？これでよかったのか？

もしかしてミュキと似ているということだけで、こんなことになったんじゃないか？

考え事をしているうちに、彼女がやってきた。

「おはよー。ご飯できてるよ！」

「美優」のトビキリの笑顔がそこにあった。

そしてその時、ボクは先ほど考えていたことなど吹っ飛んでいた。

ボクは間違っていない。

ボクは美優のことが好きだ。

そこで考え事で隠れていた、幸せに感じるがあった。

…やすらぎだ。

このやすらぎ感はいったいなんだろう？

幸せだ…

「ちょっと、ご飯さめちゃうよ!？」

彼女が笑顔でボクをせかす。

ボクはベッドから降りて、彼女を抱きしめた。

「…ボクたち、付き合ってるんだよね？」

「…うん。」

彼女はボクの中で小さく頷いた。

それ以上、なにも言えなかった。

彼女が僕の胸の中にいる。

そして、この空間を他の言葉で壊したくなかった。

彼女の傍にいたい、いてあげたい、ホントにそう思った。

ボクは彼女と向かい合い、再び唇を重ねた。

そして二人で小さく笑った。

「…ほら、ご飯冷めちゃうってば！」

ミュキ…いいよね？

ボクの中には、いつもミュキがいるから…。

都合がいいなんて言わないでね？

ちゃんと彼女には、ミュキのことを話すから…。